

全国中学生人権作文コンテストで、成東東中学校1年生の石橋友佳さんが「法務省人権擁護局長賞」を受賞しました。(応募者数全国6,624校 883,746名)

「壁を乗り越こえて」

「不便利じゃないの？」初めて会う人から、必ずといって良いほど聞かれます。

私は生まれつき、右手を自由に動かすことができません。しかし、それを不便に感じたことはありません。それは、私が右手を自由に使える便利さを知らないからかもしれません。

私の周りの人たちは、とても親切です。大きい物や重い物を持っていくと、必ず声をかけて、手をさしのべてくれます。しかし、私はそれをよく断わります。せっかくな親切心で言ってくれたのに申し訳なく思いますが、自分でやりたいことや、なすとげたいこともあるからです。障害があるからできなくても良いとか、あきらめなくてはいけないという考えはしたくありません。そう考えるよりも、他の人より二倍、三倍努力をして頑張ってみようと思うのです。私は、小学校一年生の頃、自転車に乗れませんでした。友達が楽しそうに自転車に乗って

いる姿を見て、私も乗りたいと思うようになりました。毎日、学校から帰るとすぐに練習をし、数ヶ月後には乗れるようになり、両親はとても驚いていました。二年生になると、一輪車にも乗れるようになりました。バランスをとるのが難しく、ケガもしましたが、決してあきらめませんでした。数週間後の授業参観、私は、母の手をひっぱり、一輪車に乗った自分の姿を見せました。すると母は、「もしかしらたら、寝たきりになってしまいかもしれないと言われていたのに……」と涙を浮かべながら、ほめてくれました。

それからもうたくさん、いろいろな挑戦しました。四年生になると、び箱も跳べるようになり、決して「やめなさい」とは言わず、少しでも早くできるようにアドバイスを協力してくれました。私は、その両親の優しさに感謝しています。遠くで見

守りぬいてくれたから、私はあきらめずに頑張ってきました。しかし、すべてがうまくいくわけがありません。どうしても鉄棒の逆上がりだけは自分だけの力ではできませんでした。腕に力が入らないので、自分の体を支えられず、地面を蹴り上げるのが難しく悔しい思いをしました。それでも、練習を続けました。結局、補助がない状態ではできませんでしたが、自分なりに満足するまで練習することができました。

そして私は、一つの不安もななく多くの希望を持って中学校に入学しました。他の小学校から入学した友達から、右手のことを聞かれはしましたが、それで差別をされることはありませんでした。もちろん、特別扱いされることもありませんでした。中学校では、吹奏楽部に入りました。私の学校では、一年生からコンクールに出場するの

で厳しい練習が始まりました。私は、何度も注意されました。まずはグロツケン。両手で違う音を同時にたたかなくてはなりませんでした。音單・タイミング・リズム。すべてをそろえるのは簡単なようでとても難しく、力加減や手を下ろすスピードを何度も研究しました。そして、バスドラム。バスドラムは利き手に関係なく右手でたたかのが普通です。しかし、マレットが大きく右手で持つことができません、仕方なく左手でたたかことになりました。事情がわからない人からしたら、変に見えたと思います。私は気にしませんでした。自分ができていることを、精一杯やるだけだと思っただけです。

無事にコンクールを終え、今はホルンをやっています。ホルンという楽器は、音を変えるピストンは左手で動かし、右手をベルの中に入れて楽器を支えるので、右肩が痛くなってしまうました。しかし、私はそ

れをリハビリだと思い、楽しく続けています。

もうすぐ体育祭があります。私は、クラスの皆と一緒に、全ての種目に参加します。綱引きも百足競争も一緒です。私にとっては、それが普通で、当たり前のことです。特別扱いされるのは嫌だし、してもらわなくても私は何でも皆と一緒にできます。だから私は、皆と同じことを同じようにやっているだけなのです。

私は、右手が不自由だからといって、両親をうらんだり、自分だけがどうしてというように不幸に感じたりしたことはありません。一度もありません。不自由であっても、できることはたくさんあり、楽しい生活を送っているからです。できそうにならぬと思うような事でも、あきらめずに練習をすれば、できるよになる。だから私はこう言っています。「不便利じゃないの？」
「うん。全然。」



いしばし ゆか
石橋 友佳さん